

フラグメンツ第5回（2021年1月12日 記す）

1 君と光を紡いだ日々（『わたしのアート論』）



①数年前のこと。毎年秋に開く個展も 2 カ月先に迫り、妻が 50 点ほどの候補作を抱えて相談にきた。妻は花の写真家（秋津マキ子）である。この中から個展用に 30 点ほどに絞る。どれを選ぶか？ 妻が気に入ったものと、わたしの好みは違う。結構はっきり好みが分かれる。

②人の好みはそれぞれである。アートの好みはその最たるもので、とくに、男性と女性では好みは大きく違う。また、世代によっても好みは違ってくる。だから、どれを出品するかも、なかなか悩ましい問題である。

③妻のとつては自信作でも、わたしから見ると、それほどでもないことがある。わたしが名品だと思う作品を、妻はしばしば見落としている。2人の好みに合うものはほぼ 6 割。後の 4 割はバラバラである。そんなことがよくあったので、結局、2 人で相談しながら選ぶのが習慣となった。展示会の 2 か月前から 3 週間ほどかけて、出品作を絞る。

④候補作品の中にヤツデの花があった。花も素朴だし、ペールトーン（淡い色調）の地味な感じに、妻は今一つ自信が持てないようだった。花の写真展というと、観客はどうしても、ユリやバラや桜などの華やかなものを好む。

だが、わたしはひと目みて「これは一押し」とピンときた。

⑤妻に聞くと、朝 8 時アトリエの庭で撮った。キッパリと冬が来た。そんな寒い日だった。身近なところで撮ったこともあり、妻は出来栄えにモヤモヤしていた。はじめは外すつもりだったらしい。そんなバカな事はない。庭で撮ろうとよいものよい。

⑥「冬の詩人」と呼ばれた高村光太郎。冬の厳しい精神性を簡潔にうたった。「冬が來た」は圧巻である。

きっぱりと冬が來た
八つ手の白い花もきえ
公孫樹の木も^{ほうき}簾^{れん}になった。

⑦この作品は、高太郎の冬ほどの厳しさはない。むしろ、寒い季節にも一瞬の暖かさを感じる。初冬の淡い光の中に咲く八つ手は、わたしの好みである。

光の取り入れ方の巧みさは、妻の特色のひとつである。ふつうならうるさい背後の玉ぼけも、

この作品に限っては効果的である。際立った華やかさはないが、冬の一瞬をとらえきった。

⑧出品を決めた後は、キャプション（作品のタイトル）を決める。作品のイメージがはつきりしているので、これはそんなには時間がかからなかった。

最初の案は「君と時を紡いだ日々」。ちょうど結婚40年目の年だったので、妻とともに歩んだ感慨もあった。40年といえば長い長い月日だが、振り返ってみれば一瞬のような気がする。それが自然に言葉となって出た。

⑨だが何か足りない。作品のもつ「懐かしさ」が感じられない。写真のイメージをもっとはつきりさせたい。ふと「時」を「光」にすることを思ひ立った。「君と光を紡いだ日々」。これで決まりである。結婚40年の記念にふさわしいキャプションである。妻の予想に反して、東京でもパリでも、特にプロの写真家には好評だった。「男性の写真家には決して撮れない作品」だというのである。

⑩なお、秋津の花の写真は、以下で楽しむことができる。

(1) ウェップサイト <https://www.forsythia.jp>



(2) Kindle 版写真集 <https://www.amazon.co.jp/dp/B08P5W8JLZ>

タイトルは Profusion of Flowers（百花繚乱）。2020年夏から秋にかけて撮影した最新作を含む24点。

2 嫌な感じ（『身辺記』）

①わたしは結構気が短い。若い時は、朝5時に起きてすぐ仕事にとりかかった。そんな気力も体力もはるか昔のことである。

今となっては、わたしは古いパソコンである。起動するまでに時間がかかる。ベッドの上で気力が満ちてくるまで、ダラダラと時を過ごす。六十代なら目覚めてすっと起きたものを・・・。もはやかなわぬ話である。

②手始めにモーツアルトのホルン協奏曲、次にピアノソナタ16番と17番を聴きながら手足をぶらぶらと動かす。どれも聞き流すに程よい調べである。こうして血の巡りが良くなり、起きる気になるのを待つ。満潮を待つには時間がかかる。

③ホルン協奏曲は、若くして亡くなった友人の S 君が好んでいた曲である。ピアノソナタは、妻が聴いていたので好きになった。わたしにはクラシックはよくわからない。たいていは、知人・友人の好きな曲のつまみ食いである。

だが、何事もそうだが、わたしの好き嫌いはつきりして、しかも厳しい。ピアノソナタは、いろいろ聴き比べたが、仲道郁代さんの演奏に限る。

その時にいいと思ったものを、後にネットで買ってダウンロードし、好きな楽章だけを取り出して、タブレット端末に 30 分ほどにまとめて起きがけに聞いている。

④体調が良い時は、その後、ヴィヴァルディの「調和の靈感第 6 番」を聴く。体調がいまいちの時は、スキップ。どうということはないのだが、朝ヴィヴァルディを聴くには、ちょっとした精神の張りを必要とする。

⑤かと思うと、いつもの通り下半身のストレッチをしていたら、ふくらはぎから内出血しみるタテ 20 センチ/ヨコ 8 センチほどに広がる。驚いて夜間の緊急外来に飛び込むと、原因は不明で「とりあえず様子を見る」という。わたしは「寝ている間に血管が切れたたらどうしよう」と不安で仕方がないが、ドクターはあっさりとしたものである。結局数週間して内出血は消えたが、原因不明のまま。再発の不安にかられて、結局一年以上下半身のストレッチはやめた。

⑥唾液が少なくなったのだろう、10 分も人と話をしていると喉が痒くなって、空咳をする。咳ぜんそくの前兆らしい。相手はそれを知らないから「コロナか」と後ずさりをする。「いやいや咳ぜんそくのせいですから心配いりません」といちいち説明するのも煩わしい。いやはや。。。

⑦これが老人の実態である。とはいえ、老化を愚痴っているわけではない。嘆いているわけでもない。人間の宿命だから、この程度のことは仕方がない。

自分では、ただ、誰にでもやってくる、老化の一態様を観察しているつもりである。

⑧若者には、老化は遠い話である。中年にとってもまだまだ「ひと事」だろう。だが、侮ってはいけない。いずれ皆さんにも必ずやってくる。残念ながら、これからは国の財政破綻がヒタヒタと迫ってくる。もはやわたし程度の老化さえ楽しめないかもしれない。今か

らご用心のほど。

3 この世には悪人がはびこる (『処世論』)

①悪人であってもいつも悪事をしているわけではなく、そういう機会があつて初めて悪事に手を染める。彼らはしばしば如才なく言葉は巧みだから、彼らと多少のもめごとがあった程度では、その本性は分からぬ。

極めて利害が深刻に対立したとき、はじめて彼らは本性を露わす。

②しかし、当事者以外の人々には、彼らの本性は分からぬ。マスコミも「悪人」と知らずに、彼らを持ち上げる。能天氣なものである。こうしてこの世には悪人がはびこる。

人の本性を見極めるのは、いくつになっても本当に難しい。

③職業柄、わたしは人の裏の顔を知る機会が多い。世にはびこる人の多くは偽善者であり、その品性は疑わしい (『プロ弁護士の処世術』174 ページ以下、『プロ弁護士の「勝つ技法」』164 ページ以下参照)。

40 代に早々と世間の実態を知って、わたしは幻滅した。彼らが善良そうに見えるのは無邪気にも、マスコミが善良そうなイメージを振り撒まくからにすぎない。しかし、それは実はイリュージョンなのだ。

それを知っているから、わたしは権力者、権威者、有力者などが嫌いである。彼らは、きわめてしばしば、一般市民よりはるかに悪人である。

④わたしだけではない。宗教家や先哲さえ、偽善者には悩まされた。

悪人正機説をとなえた親鸞さえ、善人を装った悪人に悩まされた。

わたしたちは、外見はそれぞれに賢者・善人・精励者のようにみせかけている。内実は貪欲であり、怒りやすく、邪悪と偽りに満ち、人をたぶらかして落とし入れる策略に満ちている (親鸞『八十八歳御筆』)。

⑤荀子は「人間の本性が悪であることは明白である。人間の善とは後天的努力で作り上げた人為的な性質である」と主張した。

人間の本性に従い性情のままに行動すれば、必ず奪い合いが始まって、次に社会秩序が乱れる (『荀子』第 23 章「性惡篇」)。

⑥ある日、山上でイエスは弟子に向かって、こう説教したという。

にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。^{いばら}からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があろうか。そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない（『マタイによる福音書』7章15-20）。

4 「弁論の全趣旨」でウソを見分ける（『処世論』）

①民事判決では、「証人が偽証している」と裁判所が考えた時は「証言はにわかに措信し難い」という。「証人はウソをついている」とはいいにくい。「措信し難い」はいわばその丁寧バージョンである。

②興味深いのは、証人がウソをついていると判断するのに、固い証拠（エビデンス！）がなくてもよいことである。証人の挙措動作、印象、主張内容など、「口頭弁論における一切の事情」（弁論の全趣旨）に基づいて、裁判官が自分の器量をかけて「ウソ」と判断する。

これは一般市民にとって「目から鱗」ではないか。裁判でさえ、証人がウソをついているかどうか判断するのに、エビデンスは必要ない。

③詳細は避けるが、わたしは判例の「弁論の全趣旨」を分析し、ウソか否かを判断する簡単なルールを抽出した。

情報に近いものが、自分の潔白を十分に説明しないときは、彼らはウソをついている。

④これは「政治家のウソ」を判断する絶好の客観基準である。特に彼らが不祥事の当事者である場合、世間が納得するに足りる十分な説明をしないときは、政治家はウソをついている。たとえば「記憶にない」は「わたしはウソをついています」と同義である。

彼らがどう言い訳するかより、「情報に近い者（たとえば、不祥事の当事者）が自らの潔白を十

分説明したか」の基準に照らして判断する。この基準を使うと、特にここ数年の政権中枢の政治家たちのウソがよく見える！

⑤自分が当事者であるのに逃げ回っている者は、「ウソつき」である。いい換えれば、「ウソをついていない」とことを証明しない限り、「彼らはウソをついている」と判断して構わない。

以下は、「ウソつき」が愛用する言い訳である。

- (1) 「記憶にない」という→事件に関与したかでなく、記憶という主観的な問題にすり替える。「記憶にない」はウソの代名詞である。
- (2) 言葉ではぐらかす。→たとえば「総合的に判断した」「適切に判断した」など。
- (3) 説明を拒否する。→たとえば「これ以上説明する必要はない」「もう終わつた事だ」など。
- (4) 逃げまわる。沈黙する。→「持病が悪化した」などと入院するのも一典型である。

⑦こうして見ると、最近の政界にはなんとあからさまな「ウソつき」が多いことか。わたしは、上記の基準の照らしてウソをついている者は、「ブラックリスト」にリストして、決して忘れない。

5 わたしは少数派である『処世論』

①この年になって笑われるだろうが、わたしは無党派である。若いときからずっと無党派である。右も左もない、表もなければ裏もない。どこにも属さない一匹狼である。信じるに足りる政党はないが、投票だけは欠かさない。政党よりは政治家個人を考えて投票した。しかし、後に彼らの本性を知って、幻滅することが多かった。その時は、彼らをすぐさま切り捨てる。二度と投票しない。

②英米へ留学して、西欧流の個人主義の洗礼を受けた。帰国して、はじめて、日本流の「空気」(=同調圧力)に息苦しさを感じた。人間関係が濃密で息が詰まりそうだった。また、顧客の八割は欧米企業だったので、仕事を通じて西欧流の合理主義の洗礼を徹底的に受けた。毎日が文化摩擦の連続だった。異文化との戦いだった。

③こうして40代を過ぎた頃から、いつも自分が「（日本という）集団の中の少数派」であることを自覚するようになった。日本の風土の中では、わたしの考えはしばしば異質だった。いつか自分でもアウトサイダーであると腹をくくった。

④1960年代に始まった自動車の排ガス規制、イラク戦争への対応、再生エネルギー/脱石炭火力発電への取り組みなど、わたしは多くの場合、少数派であり、時に異端である。

⑤多くの場合、しかし、多数意見は現状維持の後ろ向きな判断にすぎず、将来を洞察した結果とは思えない。カルホルニアで排ガス規制が導入された時も、日本の自動車業界は「ダメだ、無理だ、出来るわけはない」と批判するだけで、当初は反対一本やりだった。脱石炭火力発電への取り組みも同様である。

こういう進取の気性の衰えが、やがて、産業の衰退を招き、国の衰退を招く。もちろん当事者たちは、そんなことは思っていない。規制に反対することが、現実にうまく適応するしたやり方だと思っている。だから、結果的に世界の潮流に一步も二歩も遅れる。

⑥少数派や異端は、社会に大きな貢献をしている。多数派にならなくても、権力と無縁の存在であっても、万年の少数派であっても、少数派は存在自体に価値がある。

多数派と同様、少数派は国を構成する貴重なメンバーである。少数派がいなければ意見の多様性は失われ、文化はやせ衰え、独裁/専制/ファシズムの国になる。

少数派はもっと自信をもっていい。少数派万歳！